

自己意識尺度の因子構造の再検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 外山 美樹

筑波大学心理学系 桜井 茂男

Testing the dimensionality of the Self-Consciousness Scale

Miki Toyama and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Fenigstein, Scheier, and Buss (1975) developed the Self-Consciousness Scale, a three subscale inventory, designed to measure self-consciousness. However, some researchers have recently argued that the Self-Consciousness Scale may be more appropriately represented by a four- or five-factor structure. To determine which is the most suitable, the present study tested three-, four-, and five-factor versions of this scale. The results of a confirmatory factor analysis showed that the four-factor structure version (Burnkrant & Page, 1984) provided the most appropriate model for the data. However, two separate but correlated private self-consciousness dimensions, self-reflectiveness and internal state awareness, were also identified. The need for further conceptual and psychometric work to clarify the importance of this factorial structure is discussed.

Key words: the Self-Consciousness Scale, four-factor structure model, self-reflectiveness, internal state awareness, confirmatory factor analysis.

自分自身に注意を向けやすい性格特性がある。Fenigstein, Scheier & Buss (1975) はこのような性格特性を自己意識特性とよび、この自己意識特性の個人差を測定するために、自己意識尺度 (Self-Consciousness Scale: 以下 SCS と略す) を作成した。SCS は私的自己意識 (private self-consciousness: 以下私的 SC と略す)、公的自己意識 (public self-consciousness: 以下公的 SC と略す) および社会的不安 (social anxiety) の 3 つの側面から構成される 23 項目の測定尺度である。私的 SC とは、他者からは直接観察できない自己を意識する傾向で、この傾向の高い人は、自己の感情や気分など、内面的な自己の側面に注意を向けやすい。公的 SC とは、他者から見られる自己を意識しやすい傾向で、自分の外見や行動のスタイルに関心を向けやすく、他者に与える印象に注意を向ける傾向のことである。そして社会的不安とは、自己意識にともなって生じる対

人不安と見なしうるもので、対人状況における不安や緊張、当惑を感じやすい性質のことである。

SCS が作成され公表されると、この尺度を用いた研究が大量に行われるようになった。こうしたなかで、SCS の測定法に対する批判やその改善への提案も活発化し、特に SCS の 3 因子構造に疑問を呈する研究がこれまで数多くなされている。

Burnkrant & Page (1984) は、確認的因子分析 (confirmatory factor analysis) の手法を用いて、SCS の下位尺度である私的 SC が、「自己の内的状態の意識 (inter state awariness or internal state awariness)」と「自己省察 (self-reflectiveness)」の 2 因子に分化することを示し、SCS の 4 因子構造を提起している。「自己の内的状態の意識」とは、感情や思考などの心内活動に注意や関心を集中する傾向であり、「自己省察」とは、記憶やイメージによって自己を回想・内省する傾向である。確かに、

両者は概念的に異なっており、これを一括して「私的自己意識」と呼ぶのは不適切であるように考えられる。Piliavin & Charng(1988)も同じく私的SCの2因子構造を見い出しているが、それらとアイデンティティ探索(identity seeking)との相関を求めたところ、「自己の内的状態の意識」とは正の相関が、「自己省察」とは負の相関が見られたことも報告している。

私的SCを用いた研究はこれまで数多く行われているが、私的SCの2因子構造を支持するとすれば、これまでに得られた効果が、私的SCの「自己の内的状態の意識」次元によるものであるのか、「自己省察」次元によるものであるのか、あるいは両方によるものであるのか、今後再考していかなければならないだろう。たとえば、私的SCが高い人は、感情や動機をより強く意識するということが明らかにされている。Scheier & Carver(1977)は、私的SCの高い人はネガティブな文章を読んだ後で、より抑うつを感じることを報告している。このように私的SCの高い人の感情反応は、よりポジティブあるいはよりネガティブに両極化すると考えられているが、これは「自己の内的状態の意識」の特性によるものだと見える。一方、私的SCが高い人は、自分自身をより正確に認知でき、その評価に際しては外的な情報に惑わされないことも報告されている(Turner, 1978; Scheier, Buss & Buss, 1978)が、これは「自己省察」によるものと考えられる。

ところで、Mittal & Balasubramanian(1987)は、同じく確認的因子分析を用い、私的SCだけでなく、公的SCも2つの下位尺度から構成しうることを提唱している。自己の容貌や化粧・服装、体型やスタイルを意識しやすい「自己の外面の意識(appearance consciousness)」と自己のマナーや行動様式に注目する「自己の行動スタイルの意識(style consciousness)」がそれである。

このように、私的SCおよび公的SCの2因子構造に関する見解は、それを支持する形での研究が数多く見られる。他方、反論(Bernstein & Calvin, 1986; Britt, 1992)も提出され、現在のところなおその議論が活発である。

そもそも当初のSCSの作成に際しては、自己意識の内容として、①過去、現在、未来の自己の行動に関心が集中していること、②ポジティブあるいは

ネガティブな自己の属性の認知、③内的感情への感受性、④内省行動、⑤自己を視覚化する傾向、⑥自分の外見や行動スタイルを気にすること、⑦他者からの評価への関心、の7つが想定されており、これらに基づいて用意された項目に対して因子分析をくりかえす内に、偶然にも既述したような3因子が抽出されたのである。しかし、この3因子についての内的一貫性を報告している研究は意外に少なく、Fenigstein et al.(1975)においても時間的安定性を確認したに留まっている。

わが国における自己意識の研究は、Fenigstein et al.(1975)の論文が発表されて間もなくははじめられ、押見・渡辺・石川(1986)や菅原(1984)によってSCSの翻訳版が作成されるとともに、それらを用いて様々な社会的行動との関連性を探る研究がなされている。SCSと諸変数との関係についての研究の紹介は他に譲る(詳細は、押見, 1992; 辻, 1993を参照)が、わが国においては、私的SCおよび公的SCを既述したように2つに分化して検討している研究は、筆者らが知る限り見受けられない。辻・南山・吉岡・向山(1989)は、通常の因子分析(探索的因子分析)を行う限り、Mittal & Balasubramanian(1987)が見い出した因子は抽出できなかったことを報告している。しかし、押見他(1986)は、Fenigstein et al.(1975)のSCSの日本語版を作成した際に、同じく探索的因子分析を行ってSCSの因子構造の検討を試みたが、Fenigstein et al.(1975)が見い出した明確な3因子構造は得られず、むしろ私的SCおよび公的SCが2因子に分化するという結果に至っている¹⁾。

このようにわが国においては、SCSの因子構造に関して明確に検討されていないのが現状である。そこで、本研究では、SCSの因子構造について再検討することを目的とする。より具体的には、先行研究の自己意識尺度モデルに従って、私的SCおよび公的SCが2つの因子に分化するのかを確認的因子分析を用いて検討するとともに、見い出されたSCSの下位尺度と他の諸変数との関連性を併せて検討する。SCSが広範囲にわたって使用されていることを考えると、SCSの因子構造を十分に吟味することは、今後の研究の進展のために有益な示唆を与えるものと思われる。

方法

被調査者 茨城県の国立大学生241名(男子98名、女子143名)、茨城県の私立大学生132名(男子53名、女子79名)、東京都の専門学校生113名(男子22名、

1) 押見他(1986)は、私的SC、公的SCおよび社会的不安がそれぞれ2因子に分化する(すなわち、SCSの6因子構造)という結果を得ているが、両者をたしあわせ、3つの下位尺度を構成した。

女子91名)の計486名(男子173名, 女子313名)。被調査者の年齢平均は19.56($SD=4.27$)歳であった。

質問紙 自己意識尺度：Fenigstein et al.(1975)による自己意識尺度原版23項目を翻訳したものをを用いた。翻訳には辻(1993)と押見他(1986)および菅原(1984)を参考にした。“全然あてはまらない”から“非常によくあてはまる”の5段階評定(1～5点)であった。項目内容はFig. 1に示されている。

自尊感情尺度：Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版(桜井, 1993)を用いた。10項目で構成されており, 4段階評定(1～4点)である。

ストレス反応尺度：岡安・嶋田・坂野(1992)が作成したストレス反応尺度の短縮版(外山, 1997)を用いた。これは, 不機嫌・怒り感情尺度, 身体的反応尺度, 抑うつ・不安感情尺度, 無力的認知・思考尺度の各5項目ずつの合計20項目で, 4段階評定(1～4点)である。

オプティミズム傾向尺度：Scheier & Carver(1985)が開発したLOT(Life Orientation Test)の日本語版(戸ヶ崎・坂野, 1993)である。8項目で, 4段階評定(1～4点)である。

手続き 上記の尺度を1997年6, 7月に集団形式で実施した。

結果と考察

1. SCSの因子構造について

本研究では, 先行研究を参考にして3つのモデルを設定した(Table 1 参照)。まず1つめは, Fenigstein et al.(1975)によるオリジナルのモデルであり, 先に述べたように私的SC, 公的SC, そして社会的不安の3因子からなるモデルである。2つめは, 私的

SCを「自己省察」と「自己の内的状態の意識」の2因子からなるとするBurnkrant & Page(1984)の4因子モデルである。そして3つめは, 私的SCに加えて公的SCも2つに分化するとするMittal & Balasubramanian(1987)の5因子モデルである。公的SCは, 「自己の外側の意識」と「自己の行動スタイルの意識」のそれぞれに分化すると考える。

それぞれのモデルにおいて, 確認的因子分析を用いて因子構造の検討を行った。SCSの因子構造の検討に先だてては, まず, 私的SC, 公的SC, そして社会的不安を別々に検討した。社会的不安においては, 3つのモデルとも1因子構造を設定しているが, それぞれのモデルにおいて項目内容が微妙に異なっており(Table 1 参照), どのモデルの項目内容が最も適切であるのか検討することにした。

結果はTable 2に示されている。まず, 私的SCについて考察する。私的SCの1因子構造を仮定する3因子モデル, 2因子構造を仮定する4因子モデルと5因子モデルのGFI, AGFI(両者ともに, モデルの全体的評価の指標となる適合度指標)の値をみると, 4因子モデルと5因子モデルはどちらの指標とも同じ値であり, 3因子モデルのそれより高かった。よって, 私的SCは2因子に分化すると考えるほうが妥当であることが示された。4因子モデルと5因子モデルでは, 全体的にみると4因子モデルの方がモデルの適合度が高かった。

次に, 公的SCについてであるが, すべての指標において4因子モデルの妥当性が高かった。5因子モデルが仮定しているような公的SCの2因子構造は, 本研究においては支持されなかった。最後に社会的不安であるが, 5因子モデルが最もモデルの適合度が高かった。

以上の結果を総合すると, 私的SCは, 「自己省察」と「自己の内的状態の意識」の2因子からなるのが妥当であることが明らかにされた。一方, 公的SCにおいては, 2因子構造を積極的に採用するほどの結果は得られなかった。

ところで, 社会的不安についてであるが, 3つのモデルのうち5因子モデルが最も適合度は高かったが, 5因子モデルというのは4因子モデルの項目23が削除されているだけであり, さらに4因子モデルとは適合度指標においてわずかに差が見られただけであった。そこで, 本研究ではFenigstein et al.(1975)によるオリジナルのモデルの項目をできるだけ多く残すとの配慮から, 社会的不安においても4因子モデルを採用することにした。この4因子モデルにおいても, モデルの適合性を十分に備えていると考えられる。最終的に, 全体的な自己意識尺度の

Table 1 SCSの因子モデル

◆3因子モデル(Fenigstein et al., 1976)	
私的SC	(項目1, 5, 7, 9, 13, 15, 18, 20, 22)
公的SC	(項目2, 6, 11, 14, 17, 19, 21)
社会的不安	(項目4, 8, 10, 12, 16, 23)
◆4因子モデル(Burnkrant & Page, 1984)	
私的SC	自己省察(項目1, 5, 7, 15, 18)
	自己の内的状態の意識(項目13, 20, 22)
公的SC	(項目2, 6, 11, 14, 19)
社会的不安	(項目4, 8, 10, 16, 23)
◆5因子モデル(Mittal & Balasubramanian, 1987)	
私的SC	自己省察(項目1, 5, 15, 18)
	自己の内的状態の意識(項目3, 13, 20, 22)
公的SC	自己の外側の意識(項目2, 6, 14, 19)
	自己の行動スタイルの意識(項目11, 17, 21)
社会的不安	(項目4, 8, 10, 16)

Table 2 SCSの因子モデルの比較

モデル	適合度統計量					
	χ^2	df	GFI	AGFI	AIC	CAIC
私的SC						
3 因子モデル	118.99	35	.91	.85	48.99	-125.27
4 因子モデル	64.76	19	.94	.89	26.76	-67.84
5 因子モデル	65.15	19	.94	.89	27.15	-67.45
公的SC						
3 因子モデル	102.42	14	.89	.78	74.72	4.72
4 因子モデル	17.65	5	.97	.90	7.65	-17.24
5 因子モデル	101.01	13	.89	.76	75.01	10.29
社会的不安						
3 因子モデル	83.08	9	.93	.83	65.98	20.27
4 因子モデル	16.09	5	.98	.95	6.09	-18.80
5 因子モデル	7.71	2	.99	.95	3.71	-6.25

注) GFI, AGFIは値が大きく、1に近いほど適合度が良いとされ、 χ^2 やAICは値が小さいほどモデルへの当てはまりが良いとされる。

モデルとしては、Burnkrant & Page(1984)の4因子構造モデルを採用するのが適切であるとの判断にいたった。

SCSの4因子構造モデルのパス図と項目内容がFig. 1に示されている。「自己省察」と「自己の内的状態の意識」との間に.91という大変高い相関が見られた。また因子と観測変数との間の影響指数は、すべて5%水準で有意であった。なお、このモデル全体の適合度は、GFI=.86, AGFI=.81, $\chi^2=419.61$ (df=129), AIC=161.61, CAIC=-480.67であり、適合度の指標であるGFI, AGFIは、モデルの判断基準とされている.90には届かず、さらなるモデル改善の余地が残されている。

2. 自己意識と他の諸変数との関連性

SCSの下位尺度、自尊感情尺度、オプティミズム傾向尺度およびストレス反応の下位尺度の平均値、標準偏差、 α 係数、ならびに尺度間の相関係数がTable 3に示されている。SCSの下位尺度の α 係数は.69~.78であり、「自己省察」と「自己の内的状態の意識」の α 係数がやや低いが、ほぼ満足し得る内的一貫性が存在しているものと思われる。特に「自己の内的状態の意識」については、項目数が少ないため、今後新たな項目を付け加えるなどの処置を取り、内的一貫性を高め、より信頼性の高いモデル

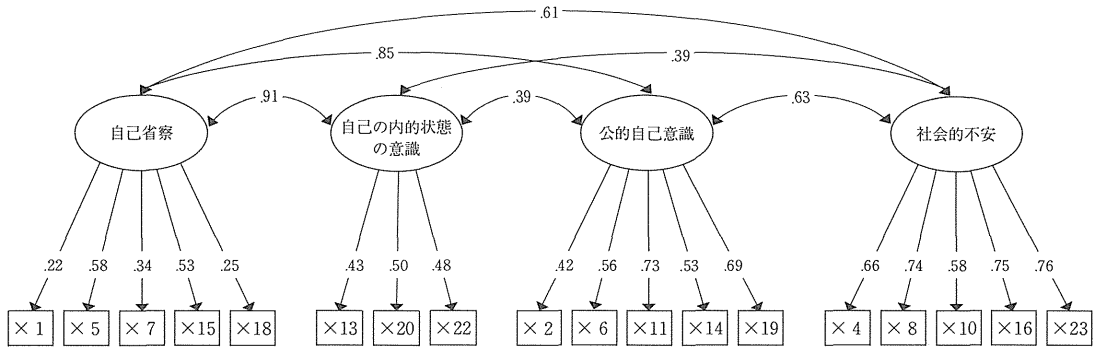
への改善が望まれる。

私的SCの下位尺度である「自己省察」と「自己の内的状態の意識」とは有意な正の相関(.46, $p < .01$)が見られた。「自己省察」はSCSの他の下位尺度である「公的自己意識」、「社会的不安」と有意な正の相関(順に、.41, $p < .01$; .41, $p < .01$)を示したが、「自己の内的状態の意識」は両者ともに無相関(順に、.10, *ns*; .09, *ns*)を示した。また、先行研究によると、社会的不安との関係においては、私的SCとは無相関、公的SCとは $r = .30$ 前後の相関が見られている(Fenigstein et al., 1975; 辻, 1993)。本研究においては、公的SCとは正の相関(.31, $p < .01$)が見られたが、私的SCの「自己省察」においてもまた正の相関(.31, $p < .01$)が認められた。

次に、私的SCと他の尺度との関係について検討する。まず、自尊感情との関係についてであるが、「自己省察」とは負の相関(-.27, $p < .01$)が見られたが、「自己の内的状態の意識」とは有意な相関係数が認められなかった。同じくオプティミズム傾向においても、「自己省察」とは負の相関(-.24, $p < .01$)が見られたが、「自己の内的状態の意識」とは無相関であった。このような傾向は欧米の研究においても見い出されている²⁾。Piliavin & Charng(1988)は、「自己省察」の高い傾向のある人は、自尊感情の問題を抱えていることを指摘しているが、これは「自己省察」の特性においてのみ見られるという事実は注目に値する。

ストレス反応(全体)およびその下位尺度との関係においては、「自己省察」(.17~.36, $p < .01$)、「自

2) Lennox et al.(1987)によると、「自己省察」と「ネガティブな評価に対する恐れ(fear of negative evaluation)」、「適切さに対する関心(concern for appropriateness)とは正の相関(順に、.43, .30)が見られた。



- × 1：常に自分自身を理解しようと心がけている
- × 2：自分のふるまいが場違いでないかと気になることがある
- × 3：ふだんはあまり自分を意識していない
- × 4：はじめての場面ではうちとけるまでに時間がかかる
- × 5：自分自身についてよく反省する
- × 6：自分を人にどう見せるかに関心がある
- × 7：自分がこういう人間であればなあときどき空想することがときどきある
- × 8：人に見られていると仕事があまくできなくなる
- × 9：自分自身についてはあれこれ考えない
- × 10：ちょっとしたことですぐどぎまぎする
- × 11：自分が人にどう見えるかが気になる
- × 12：初対面の人とでも平気で話ができる
- × 13：自分の本当の気持ちに注意がむきやすい
- × 14：人により印象を与えようといつも気をつかう
- × 15：自分はあるときなぜそのようにふるまったのかと考えてしまう
- × 16：ひとまえて話すときは不安を感じる
- × 17：でかける前には必ずみだしなみをたしかめる
- × 18：少し離れたところから自分自身を見ているように感じることもある
- × 19：人が私のことをどう思っているか気になる
- × 20：自分の気持ちの変化に敏感である
- × 21：いつも自分の容姿に気をくばっている
- × 22：なにか問題にぶつかったときは自分の心の動きに気をくばる
- × 23：人がたくさんいると神経質になる

Fig. 1 SCSの4因子構造モデルと項目内容

Table 3 各尺度の平均値(M), 標準偏差(SD), α 係数(α)ならびに尺度間の相関係数

	M	SD	α	相関係数										
				(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	
自己意識尺度														
自己省察(1)	18.98	2.90	.69	.46**	.41**	.31**	-.27**	-.24**	.29**	.23**	.17**	.36**	.17**	
自己の内的状態の意識(2)	10.46	2.22	.70	—	.10	.09	.08	.04	.16**	.16**	.13*	.19**	.05	
公的自己意識(3)	18.95	3.57	.78	—	—	.31**	-.26**	-.16**	.30**	.25**	.16**	.31**	.24**	
社会的不安(4)	16.83	4.20	.74	—	—	—	-.46**	-.47**	.25**	.18**	.13*	.21**	.27**	
自尊感情(5)	26.52	6.09	.85	—	—	—	—	.68**	-.42**	-.37**	-.22**	-.38**	-.38**	
オプティミズム傾向(6)	22.06	4.07	.75	—	—	—	—	—	-.40**	-.35**	-.23**	-.38**	-.33**	
ストレス反応(全体)(7)	37.94	12.15	.92	—	—	—	—	—	—	.82**	.75**	.84**	.83**	
不機嫌・怒り感情(8)	8.58	3.72	.88	—	—	—	—	—	—	—	.47**	.62**	.55**	
身体的反応(9)	9.97	3.36	.72	—	—	—	—	—	—	—	—	.47**	.54**	
不安・抑うつ感情(10)	9.41	4.01	.88	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.59**	
無力的認知・思考(11)	9.98	3.84	.85	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$.

己の内的状態の意識」(13~19, $p < .01$, ただし無力的認知・思考とは無相関)ともに正の相関が認められたが, その関係は明らかに「自己省察」との方が大きかった。「自己の内的状態の意識」とは, 感情や思考, 気分などの心内活動に注意や関心を集中する傾向であり, それにともなう感情的反応が強まるため, 不安や怒りの感情をより強く感じる事が考えられる。一方, 「自己省察」とは, 自己をあれこれ回想・内省する傾向であり, この傾向の高い人は, 自己評価がより正確であることが考えられる。そのため, 自己のネガティブな側面も正確に認知することにより, それにまつわるネガティブな気分が生じると考えられる。近年, 欧米を中心に, 正確な自己概念ではなく, 自分の都合の良いように歪めた自己認知こそが, 人が精神的に適応して生きていくうえで必要である(Taylor & Brown, 1988), との見解が隆盛であるが, 今後このような視点を含めた研究も必要となってくるであろう。

以上の結果より, 「自己省察」と「自己の内的状態の意識」とはその影響力の面でも違っており, 両者の独自性が明らかにされた。しかしながらその一方で, 「私的SC」をさす場合, 「自己省察」のみをその概念として捉えたほうが妥当ではないかという懸念も考えられる。事実, Gould(1986)は, 確認的因子分析の手法を用いて, Burnkrant & Page(1984)が提起した4因子モデルの「自己の内的状態の意識」因子を削除した3因子モデル(すなわち, 「自己省察」「公的自己意識」「社会的不安」の3因子からなるモデル)が, 一番モデルの適合度が高いことを報告している。本研究では, 私的SCおよび公的SCが2因子に分化するのかを検討すること, およびFenigstein et al.(1975)によるSCS原版の項目をできるだけ多く用いることを考慮したため, Stephen(1986)の3因子モデルは設定しなかったが, 本研究においても, 筆者らが採用したBurnkrant & Page(1984)のモデルよりも, Stephen(1986)のモデルのほうが適合度は高かった($GFI = .90$, $AGFI = .85$, $\chi^2 = 179.29$ ($df = 62$), $AIC = 55.29$, $CAIC = -253.40$)。Fenigstein et al.(1975)が理論化し実証した私的SCは1次元的なものか, あるいは本研究で見い出されたように2次元として捉えるべきなのか, それとも2次元として見い出された「自己省察」のみを考えるべきなのか, 今後さらなるデータの蓄積が必要である。

まとめと今後の課題

本研究では, 確認的因子分析の手法を用いて,

SCSの因子構造の解明を図った。その結果, 本研究では, Fenigstein et al.(1975)が見い出した3因子構造ではなく, Burnkrant & Page(1984)が提起した「自己省察」「自己の内的状態の意識」「公的自己意識」「社会的不安」からなる4因子構造と考えるほうが妥当との結論を得た。しかし, モデルを改善する必要性も見い出され, 特に私的自己意識の2因子構造に関しては, 今後多方面からの検討が必要であることが明らかにされた。以下に今後の課題を3つ述べておく。

まず第1に, 私的自己意識の検討を含めたさらなるモデルの検討が挙げられる。本研究では, モデル全体としての適合度の指標, GFI , $AGFI$ は, モデルの判断基準とされている.90には届かなかった。また, 内的一貫性を測定する α 係数もそれほど高くはなかった。今後は, 適合度を下げている項目を削除する, 新たな項目を付け加えるなどの処置を施して, より適合度の高い, 信頼性の高いモデルへの改善が望まれる。

第2に, 性差の問題がある。本研究は男女合わせたデータを用いて分析を行ったが, 自己意識は男女間で異なる構造をもっていることが報告されている(押見他, 1986)。今後は, 性差も考慮に入れた分析が必要である。

最後に, 本研究では, 大学生および専門学校生を被調査者としているが, 自己意識の発達を考えると, 被調査者の枠をひろげた検討も必要であろう。

引用文献

- Bernstein, I. H., Teng, G. & Garbin, C. P. 1986 A Confirmatory factoring of the Self-Consciousness Scale. *Multivariate Behavioral Research*, **21**, 459-475.
- Britt, T. W. 1992 The Self-Consciousness Scale: On the stability of the three-factor structure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 748-755.
- Burnkrant, R. E. & Page, T. S. Jr. 1984 A modification of the Fenigstein, Scheier, and Buss Self-Consciousness Scales. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 629-637.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F. & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Gould, S. J. 1986 The Self-Consciousness Scale: A confirmatory analysis. *Psychological Reports*, **59**,

- 809-810.
- Lennox, R. D., Welch, L. K., Wolfe, R. N., Zimmerman, B. M. & Dixon, W.A. 1987 Assessment of self-consciousness. *Representative Research in Social Psychology*, **17**, 53-74.
- Mittal, B. & Balasubramanian, S. K. 1987 Testing the dimensionality of the self-consciousness scales. *Journal of Personality Assessment*, **51**, 53-68.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, **5**, 23-29.
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-15.
- Piliavin, J. A. & Charng, H. 1988 What is the factorial structure of the private and public self-consciousness scales? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **14**, 587-595.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 桜井茂男 1993 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, **29**, 203-208.
- Scheier, M. F. & Buss, A. H. & Buss, D. M. 1978 Self-consciousness, self-report of aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, **12**, 133-140.
- Scheier, M. F. & Carver, C. S. 1977 Self-focused attention and the experience of emotion: Attraction, repulsion, elation, and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 625-636.
- Scheier, M.F. & Carver, C.S. 1985 Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectancies. *Health Psychology*, **4**, 219-247.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1993 オプティミストは健康か? 健康心理学研究, **6**, 1-11.
- 外山美樹 1997 ストレス反応に及ぼす生活ストレスラーと自尊感情の影響—ネガティブ, ポジティブの生活ストレスラー尺度を作成して— 筑波大学人間学類卒業論文(未公開)
- 辻平治郎・南山真美・吉岡深雪・向山康代・梅本堯夫 1988 他者意識が感情と感情特性の認知に及ぼす影響(1)~(4) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 414-421.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- Turner, R. G. 1978 Self-consciousness and speed of processing of self-relevant information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 456-460.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.